そおの歴史ゼミナール（曽於市）

発表者：白　鳥　明　信　氏

皆様こんにちは。そおの歴史ゼミナールの会員であります白鳥明信と申します。よろしくお願い申し上げます。

1　はじめに

まず、曽於市について少々お話したいと思います。

曽於市は、末吉町、大隅町、財部町の３町が合併して誕生して12年目になります。ただ今姶良市の方の話では人口が増加しているということでうらやましい限りですが、人口はこの間に8,000人も減少しましたけれども、３町の交流は盛んになり、多くの人を知る機会が増えてまいりました。また、志布志市、大崎町、鹿屋市、霧島市、都城市に囲まれた海のない内陸市でありますが、明治４年に都城県が設置され、１年間ほど都城県に属していましたので、今でも都城市との関係、特に経済的な結びつきは深く、曽於市民は気軽に買い物や食事に出かけています。

主な産業は畜産と農業ですが、企業としては売上高県下５位の食品加工のナンチクがあります。国道10号線沿いには四季祭市場がありますが、地産の野菜を主体とする昼食のバイキング料理は人気があり、４月には座席が140席に増設されましたけれども、常に満席状態で休・祭日は待たされる場合が多いです。また、曽於市観光特産開発センター主催のバスツアーにより県内外から多くの観光客が来るようになりましたが、特産品としては、牛、豚、鶏の食品加工製品やユズ製品、茶菓子などがあります。

次に、そおの歴史ゼミナールについてお話したいと思います。

そおの歴史ゼミナールは、歴史の好きな者たちが集まり、史跡の清掃や散策、展示物の掲示、研修、視察、交流などを行う文化財愛護のグループで結成されて４年目を迎えます。交流会の宴はいつもお開きの時間まで密度の濃い話で盛り上がります。現在会員は19名

で20代のうら若い女性から80代の熟年者までの老若男女で構成され、平均年齢は63.7歳となっていますが、年代の異なる人の意見は貴重で片言隻語が身にしみます。歴史に興味・関心が深いのは皆が共通しますが、メンバー一人ひとりは個性豊かで探究心が旺盛であります。

代表の竹内瑞江氏は30代の妙齢ですが、きめ細かく気配りし、何事も用意周到で会員を巧みにリードし、会員は快くついてまいります。

寺島幸男氏は東京出身ですが、製薬会社を退職後、奥様のふるさと末吉に来て８年目を迎え、身近にあるあらゆるものに好奇心を抱き新鮮な目線で探求されています。郷土史の年表作成や田の神、石橋、水車、旧志布志線路跡、神社の調査と研究に没頭され、竹藪をかき分け、崖を下りて人跡未踏の現場に足を運んでいます。昨年７月21日付南日本新聞は、一面トップで「２万9,000年前の火山岩侵食で天然アーチの橋ができ、ジオパークの目玉になる」と報じています。これは寺島氏が石橋を調査中に発見されたものです。

加塩英樹氏は、講座数105ある総合大学の講座の１つ、そおの歴史探訪の講師で、郷土の史跡の発掘調査や案内板の設置、市民への啓蒙活動に日々奮闘されています。歴史講座は人気の的で、講師の熱意にほだされて申込者は毎年定員オーバーしています。過年度は午前と午後の２回に分けて受講希望者全員に講座を実施されるなど、40代の若さではありますが、曽於市の狭い道まで精通し、郷土の生き字引的存在となっています。

２　文化財保護活動

メインの活動状況についてご紹介します。

まず、史跡の清掃についてですが、そおの歴史探訪の受講生は毎月１回、加塩講師に導かれて郷土の史跡を実地見学します。暑い時期は草木が繁茂し、朽木が倒れたりして思うように現場に足を運べないときがあります。前日にボランティアグループが箒やビーバー、鎌などの作業用具を持参し、受講生の見学地周辺を清掃します。８月は縄文時代の遺跡である中岳洞窟周辺を清掃しましたが、暑さできつかったですけれども、清掃後は心地よい汗が頬を流れました。

次に、展示物の掲示についてです。

まず、市内にある「田の神さぁ」の写真をパネルに貼り付け、３町を巡回して展示したところ、2,000名の見学客がありました。田の神は鹿児島県本土と宮崎県諸県郡地方の南九州旧薩摩藩領内のみに存在する石像で、江戸時代中期ごろから今日まで300年近くの間、地域の住民により五穀豊穣、豊年満作、子孫繁栄の神として大切に祀り継がれ、親しみを込めて人々から「田の神さぁ」と呼ばれています。全部で2,000体の田の神があると言われていますが、曽於市内では141体の田の神が確認されています。いずれの田の神も素朴で温和な顔立ちをされており、心が癒やされます。

続いて、石橋についてですが、市内には45基ありますけども、江戸時代から昭和20年代までに架けられた交通の重要な構造物で、人々の生活と切り離せない宝として今日まで大切に守り受け継がれています。役目を果たし静かに佇んでいる橋や現役の橋として使用されているものもあります。いずれも構築技術やデザイン、地域関係などから文化財として価値があります。昨年９月の台風により曽於市内の３基の石橋が被害に遭いましたが、市内唯一の江戸時代の石橋で県内でも最も古いと言われ、地域住民のシンボルでもあった恒吉太鼓橋が完全流出したことに住民は心の支えを失い、痛恨の極みだろうと思っています。

続いて、水車についてですが、市内には13基ありますけども、公園や神社に展示されているものが５基、残る８基は農業用に使われています。

続いて、でこん川についてですが、末吉町南之郷を大淀川の源流である川が流れています。梅雨期の６月頃は水深が70センチ～１メートル、川幅が４～５メートルの川ですが、毎年大根ができる11月頃になると南之郷辺りでは川水が涸れて流れなくなります。春先になると自然に水が流れてきます。伝えられるところでは、老婆が川べりで大根を洗っていると、通りがかりの旅の僧が空腹に耐えかね大根１本を請うたが、老婆は与えようとしませんでした。旅の僧は怒って川に杖を突き立てると、不思議に今までこんこんと流れて

いた水が涸れてしまい、白い河原になったということです。この旅の僧は弘法大師であったと言われています。

続いて、旧志布志線路についてですが、都城から志布志までを結んでいた鉄道線路ですけれども、大正12年に都城と末吉間が、同14年に全線が開通し、地域の人々の足として、物資流通の要として重要な役割を果たしてきました。自動車の普及により利用者が減少し、昭和62年に廃止となり、64年の歴史に幕を閉じました。今年は志布志線が廃止されて30年になりますが、線路跡を追いかけて見つけた同線の痕跡と往時の懐かしい写真を市立図書館の廊下に展示しました。ボランティアグループの一人ひとりが仕事を分担し、和気あいあいの中で準備をしました。

続いて、西南戦争に関する曽於遺跡についてですが、マスコミでは重視されていないけれども、大隅半島でも官軍と薩軍との間で激戦が行われました。

3　文化財保護啓発活動

各パネル展の開催のほか、ゼミナールの会報を発行しています。会員一人ひとりがこれまでの研修成果を発表し、文化財保護の普及啓発や見応えがある貴重な資料となっています。

4　文化財を知るための研修

市の史跡と関連のある史跡めぐりで都城市や鹿屋市のほか、佐賀県や大分県を研修視察しました。佐賀県唐津市の九州ふるさと館や名護屋城博物館、豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に本営を築いた名護屋城周辺の陣跡巡りをしました。また、大分県豊後高田市にある天念寺の修正鬼会は、五穀豊穣、国家安泰、無病息災などを祈願する宗教行事で、曽於市の熊野神社の鬼追いを彷彿させる伝統行事でした。

5　おわりに

私はこれまで道路脇にある石像や石柱を見過ごしていましたが、歴史講座を学んでから、足をとめて見るようになりました、各時代の知識に乏しく、時代を遡るほど先人の様子は厚い壁に包まれていますが、多くの人の意見に耳を傾け、ベールを１枚でも剥いでいきたいと思っています。

今後も、そおの歴史ゼミナールの会員は、郷土を中心とした先人の歩みを学び続け、市民を啓発し、より豊かな社会になれるよう貢献してまいりたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。